

My lovely
Teddy Bear is
short and fat.



くますけと一緒に

新井素子

新潮文庫



くますけと^{いつしよ}一緒に

新潮文庫

あ - 19 - 2

平成五年三月二十五日 発行

著者 新^{あら}井^い素^{もと}子^こ

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
営業部(〇三)三二六六―五一
電話 編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社

© Motoko Arai 1991 Printed in Japan

ISBN4-10-142602-3 C0193

新 潮 文 庫

くますけと一緒に

新 井 素 子 著



新 潮 社 版

5028

く
ま
す
け
と
一
緒
に

1

昨日はお葬式だった。

パパとママの。

うちはあんまり親戚しんせきづきあいをしていないしうがない家だったので（唯一ゆいいつ顔が判わかる、千葉のおばさんがこう言ってた。ただあたし、千葉のおばさんはあんまり好きではない）、こういう時、たよりになる親戚が、全然きてくれないのだそうだ。

でも、それでも。親戚だつていう人が、五、六人来た。遠縁えんげんつて親戚の人。

学校からは、先生とクラス委員が二人。押坂おしざか先生だけじゃなく、三年の時の担任の木島きじま先生もきていた。

あと、知らないおじさんやおばさん——パパの会社の人やお友達、ママのお友達だそうだ——が沢山と、近所の人と、裕子ゆうこさん。

近所のおばさん達は、千葉のおばさんの指揮で、お葬式の用意だの何だの、ずいぶんいろいろとやってくれたのだそうだけど、結局とくろの処、少しでもあたしにかまってくれ、少しでも

あたしに優しくしてくれたのは、裕子さんだけだった。

裕子さんが来てくれた時、あたし、千葉のおばさんの手で、無理矢理黒い服に着替えさせられていた。おばさんは、あたしの簞笥たんすの中をひっくり返し（あたしがあんな服の出し方をしたら、絶対ママに叱しかられるのに、おばさんは大人だから叱られない。いいな。あ、でも、ママはもう死んじやったから、あたしのことを叱ったりしないのか）、『ああもう、中学へあがつていれば制服でいいのに、この年じゃ喪服になりそうな服なんてありやしない』ってぶつぶつ言いながら、それでもフリルのついた黒い服をみつけたして、嫌いやがるあたしに無理矢理それを着せつけたの（だって、この服は、『とっておき』の服だから、普段は絶対着ちゃいけません、おまえはいつも服を汚すからって、ママが言っていたんだもん。それとも……お葬式って、『とっておき』の、日なんだろうか？）。それからおばさん、あたしの手からくますけを引き離そうとして、嫌がったあたしが泣きだしそうになった時、裕子さんがやってきたのだ。

「ああ、成美なるみちゃん」

あたしの部屋は、玄関の一番近くにある。いつの間にか玄関からはいつてきた裕子さん、リビングの方に作ってあるお葬式セットの処へゆく前に、まずあたしの部屋をのぞいてくれ、無言でくますけにしがみついているあたしとおばさんに目をとめた。

「成美ちゃん、可哀想かわいそうに、可哀想に」

それから裕子さん、千葉のおばさんをおしのけるようにすると、ぎゅつとあたしのことを抱き締めて、あたしにほおずりしてくれる。

「心細かったでしょう、成美ちゃん。パパとママがあんなことになるだなんて……裕子おばさんも、まだ、信じられないのよ」

「裕子さん……」

裕子さんのほおは、ぬれていた。それであたし、裕子さんが泣いているんだなっということが判って、何だか申し訳ないような気分になる。だって、裕子さんが泣いているのって、きつとママが死んで哀しい^{かな}からだし、なのに、ママが死んで、一番哀しがらなきやいけない^{はず}筈のあたしは、全然泣いてなんかいないんだもの。

「あ……失礼ですが、あなたは、片山、さん？」

と。裕子さんにおしのけられて以来、不愉快そうな顔をして裕子さんとあたしを見ていた千葉のおばさん、はっと何かに気がついたような声をあげる。その声を聞いて裕子さん、あたしから手を離し、ちよつと右手で目をふいて、それから慌てて^{あわ}千葉のおばさんに会釈^{えしやく}をする。

「あら、すいません、私ったら……ちよつと動転していたみたいで。片山裕子と申します。幸代^{ゆきよ}さんとは、生前大変親しくしていただきました者です」

幸代っていうのは、ママのことなの。

「安西でございます。千葉に住んでいる、幸代の叔母です」

「あ、千葉のおばさま。千葉のおばさまのお話は、幸代さんからよく伺っておりました。何でも一番親しい御親戚の方で、大変お世話になっている方だつて……」

「ああ、まあ……何せ、この家はほんとに親戚づきあいをろくにしない家で、親しい親戚つて言つたらうちくらいしか……あら、ごめんなさいね、今言うようなことじゃありませんでしたわね。とにかく、ただ……今回のこと、幸代の叔母として、感謝致します。どうもありがとうございます」

千葉のおばさんの目の中。何だか微妙な感じがゆれているのが判る。自分をさしおいて、裕子さんが妙にあたしと親し気なのが氣にいらないうって感情と、でも、それ以上に、やっかいなことに巻き込まれなくてよかった、もの好きにも裕子さんがあたしを引き取るって決めてくれてほんとに良かったって思いと。

「いえ、そのことは、今は。……ところで、私が邪魔をする格好になつてしまいましたけれど、成美ちゃんのお仕度は、もう……？」

「ええ、これでいいと思いますよ。ただ、その……ぬいぐるみの熊はね、おいていかなきゃ、いけません」

それから。大人同士の会話を終えると、おばさん、またくますけに目を移し——あたしからくますけを取り上げようとする。

「あ、嫌っ！ 嫌あ！ くますけはあたしといふのっ！」

くますけをひっぱるおばさん。必死になってくますけを取り上げられまいと、くますけにしがみついた。裕子さんが、そんなあたし達の間に割り込んできてくれた。

「あの、安西さん。成美ちゃんはいつだってこのくますけを手放さない子ですから……まして、こんな、御両親のお葬式って日ですもの、くますけは成美ちゃんに抱かせておいてよろしいんじゃないですか？」

「だって、そんな、あなた。成美はもう四年生ですよ。四年生にもなって、ぬいぐるみの熊が手放せないだなんて……まして、今日は、成美の両親の葬式なんです。そんな日に、成美が熊を抱いているだなんて……」

でも。
裕子さんがあくまで、きつとした表情をしてくれたので、おばさん、しょうがなしに、くますけから手を離す。

「ま、いいでしょう。この子が、ぬいぐるみを終始手放せないような変な子で、まして親の葬式にも、涙一つ流すことなく、泣くっていったらぬいぐるみを奪われそうになった時だけだっという変な子であつても、それで困るのは、どうせこの子を引き取ることになるあなたなのだから。私の知ったことじゃないわよ」

その時、おばさんの瞳は、口で言うよりはるかに雄弁にそんなことを言っており——それ

から、おばさん、肩を軽くすくめて、あたしのことは裕子さんにまかせたって感じで、あたしの部屋からでていってしまおう。

「あの……裕子、さん？」

「なあに、成美ちゃん」

「あの……くますけ、連れていっちゃ、駄目^{だめ}？ おいていかないと……変な子だって、みんなに思われる？」

「成美ちゃんがくますけをおいてゆく気になったなら、おいていったらいいと思うわ。くますけだって、じつとここで、成美ちゃんの帰りを待っていてくれるし。でも、もし、成美ちゃんがくますけにいて欲しいなら……なら、誰に遠慮することがあるの、連れておゆきなさい」

「うん！」

だからあたしは、裕子さんが好きなのだ。裕子さんが大好きなのだ。ひよつとしたら——うん、多分——パパやママより、好きなかもしれない。

☆

……あたしは。

パパとママが、嫌い^{きら}だった。

いっつも、怒っている、パパ。

やっぱり、いつも、怒っている、ママ。

これだけでも充分嫌いだったのに、その上、パパとママは、しょっちゅう喧嘩けんかをしていたのだ。喧嘩して、喧嘩して、喧嘩して……結婚して、とつても嘘うそだって、あたし、思っていた。好きあった二人が結婚するだなんて信じられない！もし、本当に、一回でも好きあったことがあるなら、何でパパとママは、あんなにひどい喧嘩ばかりしなきゃいけなかったの？

それに、その上。

喧嘩の理由の半分くらいが、あたしのことだっていうのが、もつと、我慢、できなかった。

成美はなんであんな子になったんです！

成美がおかしいのはおまえの愛情がたりないせいだ！

あなたこそ、いつ、成美にかまってくれました？

……あたしは、おかしいのだろうか？たとえあたしには聞こえないって二人が思っている処で言っているだけであつても、パパとママは、あたしのことを『おかしい』と言った。

葉子ちゃんみたいな苛めいじめっ子は、あからさまに、あたしのことを『おかしい』って笑った。

……あたしは、『おかしい』、のだろうか？そして、あたしがおかしいから、好きあつて結婚したパパとママは、あたしのせいで喧嘩をするんだだろうか？

今。

パパとママが、同時に死んでしまつて、実はあたし、全然哀しくないの。だって……あんな喧嘩を、これ以上毎日聞かされるくらいなら、二人が死んでしまった方がいいって、思つていたんだもの。

でも。

裕子さんでさえ、単なる、ママの友達でしかない、裕子さんでさえ、ママが死んだ^{ため}に泣いてゐるって判つたあたし、何だか情けなくなる。

普通だったら、パパとママが死んで、一番泣くのはあたしの筈よね。なのに、そんなあたしが泣けないで、裕子さんが泣いてしまつて……。

裕子さんの心を、意識した時だけ、あたし、何か、申し訳なくなる。恥ずかしくなる。あたしは、パパとママが死んだって、全然、泣くことができないのだ——。

☆

裕子さんは、ママの親友だ。

あたしがもの心ついた時から、最低でも月に二回くらいは、裕子さん、うちに遊びにきていた。パパとママのことが好きじゃなくなつてからは特に、あたしは裕子さんのことが好きで——ただ一人、この世の中であたしが心から好きな人は、この裕子さんだろう。

あたしが裕子さんのことを裕子さんって呼ぶと、世の中の大人の^{まゆ}中には眉をしかめる人がある。そういう人達は、あたしに、裕子さんのことを『裕子おばさま』とか『片山のおばさ

ま』とか、せめて『片山さん』って呼ぶようにって言う。裕子さんって呼び方は、対等の友人同士の呼び方で、あきらかに目下のあたしがそう呼ぶのはいけないのだそうだ。

でも、あたし、この理屈がよく判らない。あたしは裕子さんのこと、『裕子』って呼び捨てにしている訳じゃない。ちゃんと敬称の『さん』はつけているし、『裕子さん』が悪くて『片山さん』がいい理由、どうしてもよく判らない。まして——最近でこそ、結構な年になつてしまった裕子さん、自分で自分のことを抵抗なく『裕子おばさん』って言うようになってるけど、昔は裕子さん、『おばさん』って呼ばれるのが本当に嫌いだつたんだもの。本人が嫌がるように呼ぶのが礼儀になつたことだなんて、あたしにはとっても筋が通っていないように思える。

この前の日の親族会議で（と、千葉のおばさんは言っていた。ろくに親戚がきてくれない筈のうちで、どうして『会議』なんてものができるのか、あたしにはこの理屈もよく判らない。会議って、ある程度の数、人がいないとできないんじゃないかしら？）、裕子さんがあたしを引き取ることになつたって聞いた時は、あたし、本当に嬉しかった。パパとママが死んだばかりだから、そんなことしたら不謹慎だつて判っていて、だからやらなかったけど、ほんとは万歳したかつたくらい。

死んだパパとママは、死んじやって可哀想だとは思うけど、でも、パパとママから離れて、この先ずっと裕子さんと暮らせるなら——あたし、本当に嬉しいんだもの。

というのは。

裕子さんは、この世の中でただ一人、くますけのことを怒ったり笑ったりしない人なんだもの。あたしが、くますけと一緒にいることを普通に認めてくれる人なんだもの。くますけも、きっと裕子さんのことだけは好きだと思う。

パパとママは、隙^{すき}さえあれば、あたしからくますけを取り上げて捨ててしまおうとしていた。先生は、一貫して、くますけを学校へ連れてきてはいけないって言ってた。葉子ちゃんみたいな苛めっ子は、あたしだけを苛めてればいいのに、くますけまで苛めた。親戚の人も、近所の人も、小学校四年生のあたしが、どこへ行くにもくますけと一緒にじゃなきゃ嫌だって知ると、露骨にあたしのことを変な子だって目でみだした。

こうして、みんな、みんな、裕子さん以外の人はみんな、くますけを苛めたり莫迦^{ばか}にしたり捨てようとしたり変な目で見るのだ。くますけは何も悪いことをしないっていうのに。くますけには、何一つ、悪いことなんてできないっていうのに。

……と、思い、たい。

……そうなんだろう、と、思う。

くますけは、ぬいぐるみだし、ぬいぐるみが悪いことをしただなんてお話は、あたし、今まで一回も読んだことはない。

でも。

今、あたしが、たった一つ気がかりなのは、これが罰ではないのかっていうこと。

パパとママが死んでも、今の処あたしはそんなに哀しくないけれど、でも、ひよつとしてひよつとしたら、パパとママが死んだのは、神様があたしに与えた罰なのかも知れない。パパとママが死んだら、とにかく娘が哀しむだろうって、勝手に思ってしまった神様が、あたしに与えた罰なのかも知れない。

と、いうのは。

あたし、葉子ちゃんに大怪我^{おおけが}をさせたのだ。ううん、あたしは何もしていないけど、くますけが——くますけが、あたしの頼みをきいて、葉子ちゃんを交通事故にあわせてしまったのだ。

そうしたら。葉子ちゃんの交通事故の次の日に、パパとママが交通事故で死んだ。

パパとママの死は、神様が、あたしに与えた罰なんだろうか？

もしそれが罰なら、それはそれで、いい。あたしは素直にその罰を受け止めてみせる。

その覚悟はあるのだけれど——でも、その時には、とても怖い事実を認めなきゃいけない。

その事実ってつまり——くますけは、悪いことができるぬいぐるみだってこと。勿論^{もちろん}、基

本的に悪いのはあたしなんだけど、でも、くますけには悪いことが実行可能なんだろうか？

それを、思うと、あたし、怖い。

この、くますけの、暗黒面を知られてしまったら、裕子さんだって、くますけのことを嫌